

第0章 シンポジウムの企画と評価

1. シンポジウムの企画

子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウムの企画は、企画委員5名及び「あしたの日本を創る協会」の事務局員2名、シンポジウム開催地の生活学校の方々と、協働で行った。シンポジウムの開催日が2005年12月上旬から2006年2月上旬までと、時期の違いがあったため、開催日の早い地域から順次、企画をたてていった。9月から企画を始め、11月頃までにテーマの決定と事例の選定を行った。事例調査は、2005年10月～2006年1月に実施している。

なお、シンポジウムのテーマ設定は、その開催地の子育て支援の活動状況や生活学校の方々の希望に合わせて決定するように心がけた。また、各地域でのシンポジウムの打ち合わせ及び事例調査では、企画委員が2名ずつ担当し、多角的に情報収集できるように努めた。具体的には、以下のように進めた。

(1) 企画委員会議

企画委員会議は、下記のような日程と内容で3回実施した。また、企画委員会議の他に、メール上での打ち合わせや担当地域ごとの個別の打ち合わせが行われた。なお、企画委員が関わったシンポジウムは、群馬、三重、大阪、大分の4ヵ所である。

	日時	場所	内容
第1回	2005年9月14日 15:00～17:00	東京市政会館	・シンポジウムの企画に関する趣旨の確認 ・シンポジウム開催地の生活学校の活動状況報告 ・シンポジウムの方向性に関する話し合い
第2回	2005年10月18日 10:00～13:00	筑波大学	・三重県鈴鹿市及び大分県由布市での打ち合わせの報告 ・各地のシンポジウムのテーマ及び活動事例の選定に関する話し合い ・担当地域の決定 ・今後の進捗に関する確認
第3回	2006年1月22日 13:00～15:30	筑波大学	・三重県鈴鹿市シンポジウム終了に関する報告 ・大阪及び群馬の打ち合わせ及び事例調査の報告 ・報告書作成に関する話し合い ・今後の進捗に関する確認

(2) シンポジウム開催地との打ち合わせ

シンポジウムが開催される地域の生活学校の方々と打ち合わせを、1～2回ほど実施。

打ち合わせ場所	日程及び担当者	打ち合わせ内容
三重県鈴鹿市役所庁舎	2005年10月4日 担当：末富・渡辺峯	・鈴鹿市子育て支援課の小林卓課長より、鈴鹿市の子育て・子育て支援の現状を伺う。 ・シンポジウムのテーマ、基調講演、活動事例、運営に関して話し合う。

大分県由布市 はさま未来館	2005年10月15日 2006年1月16日 担当：遠藤・渡辺 峯	・シンポジウムのテーマ，基調講演，活動事例，運営 に関して話し合う
大阪市中央区 大阪府消費生 活センター	2005年10月25日 担当：石井・丹治 藤田	・シンポジウムのテーマ及び運営に関して話し合う この後，シンポジウムの企画・運営は，大阪府生活 学校で実施。
群馬県前橋市 昭和庁舎	2005年11月25日 12月19日 担当：石井・丹治 峯	・シンポジウムのテーマ，基調講演の講師選定，活動 事例の選定，当日運営に関して話し合う 尚，基調講演の講師及び活動事例に関しては，「NPO 法人市民メディアペーパーかんぱにー」代表の荒川香 苗さんから情報提供を受けた。

(3) 事例調査及びシンポジウムの打ち合わせ

シンポジウムで活動報告していただく団体の調査及びシンポジウムの打ち合わせを実施。

事例調査の対象者	日時	担当者
はさま地域子ども教室「学楽多塾」	2005年10月15日 10時～15時	遠藤・渡辺
横浜市神奈川区 「すくすくかめっ子事業」	2005年10月30日 11時半～12時半 12月11日 11時～12時	末富・渡辺
「子どもが育つまち 天白子ネット」	2005年11月22日 13時半～16時半	末富・渡辺
大阪府高槻市立柱本幼稚園	2005年12月16日 14時～17時	丹治・渡辺
「つるおか子どもの家」	2006年1月16日 15時～19時 1月17日 11時～14時	遠藤・渡辺
「こねこクラブ/ひよこクラブ」	2006年1月26日 10時～12時	石井・丹治
「NPO法人市民メディアペーパーみんなと かんぱにー」	2006年1月26日 13時～17時	石井・丹治

なお，事例調査では，お忙しいなか，長時間おつきあい頂き，深く感謝致します。この場を借りて，お礼を申し上げます。ありがとうございました。

(4) 報告書

本報告書は，各地域のシンポジウム報告と，シンポジウムで事例発表を行った団体の活動事例集からなっている。そのため，シンポジウム報告編では，事例発表を簡潔にまとめてある。また，シンポジウム当日に配付された資料も巻末に載せてある。必要に応じて，参照して頂きたい。なお，本報告書の執筆分担は，下記の通りである。

- ・石井 久雄：第0章，第1章，第6章
- ・渡辺 恵：第3章，第9章，第11章，編集
- ・末富 真弓：第2章
- ・遠藤 宏美：第10章，第12章
- ・丹治 恭子：第4章，第7章，第8章
- ・井上 嘉人：第5章

2. シンポジウムの評価

全国5カ所で行ったシンポジウムは、参加者にどう映ったのであろうか。参加者によるシンポジウムの評価について検討していくことにしよう。今回のシンポジウムは5会場で行ったが、統一形式のアンケートを行わなかった福岡を除く、4会場のアンケート結果を取り上げる。アンケートに回答したのは158名で、その内訳は大分48名、三重24名、群馬21名、大阪61名である。

以下では、「参加者の属性」、「基調講演の評価」、「事例報告・パネルディスカッションの評価」、「シンポジウムの効果」の4つの側面からアンケート結果をみていくことにする。

(1) 参加者の属性

会場に足を運んだのは、どのような人々だったのであろうか。「参加者の性別」をみると、女性が8割近く占めており、圧倒的に女性の参加者が多い(図1参照)。「参加者の年齢層」をみると、60代の方が32.9%と最も多く、次いで70代の方が24.7%となっている(図2参照)。60代と70代の方々が参加者の6割近くを占めており、参加者の年齢層は比較的高い。女性であり、年輩である方々が多かったという点では、特定層の参加者が多かったといえる。そうした意味では、参加者のターゲットが絞られていたシンポジウムであったといえよう。今後も、今回と同じ特定層を参加者として見込んでシンポジウムを開催するのか。それとも、別の特定層を参加者として見込んだり、特定層に絞らずに多様な層の参加者を見込んだりしていくのか。今後の検討課題の一つである。



図1 参加者の性別 (%)

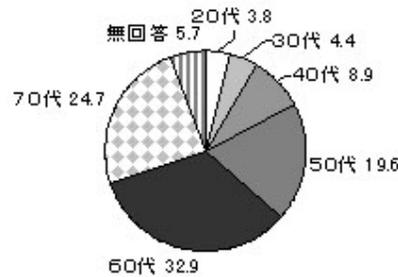


図2 参加者の年齢層 (%)

(2) 基調講演の評価

参加者は基調講演をどのように受けとめていたのであろうか。まず、「基調講演のわかりやすさ」という点からみると、56.3%の者が「とてもわかりやすかった」、35.4%の者が「わかりやすかった」と回答している(図3参照)。合計すると9割以上の者が、講演を理解しやすかったと評価しているのである。講演者のメッセージが、多くの参加者に届いたといえる。次に、「基調講演の時間配分」をみると、4分の3以上の者が「ちょうど良い」と答えており、講演の時間配分は適切であったといえる(図4参照)。

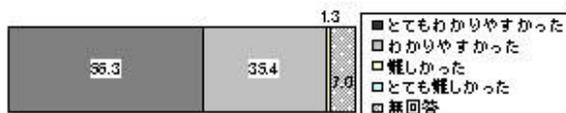


図3 基調講演のわかりやすさ (%)



図4 基調講演の時間配分 (%)

(3) 事例報告・パネルディスカッションの評価

事例報告やパネルディスカッションは、参加者にとって好評だったのであろうか。「事例報告・パネルディスカッションの良さ」についてみてみよう(図5参照)。「とても良かった」と答える者が44.9%、「まあ良かった」と答える者が38.6%となっており、合わせて8割以上の者が、事例報告やパネルディスカッションは「良かった」と答えている。参加者の満足感が伺える。「事例報告・パネルディスカッションの時間配分」では、7割近くの者が「ちょうど良い」と答えており、時間配分は適当であったといえる(図6参照)。

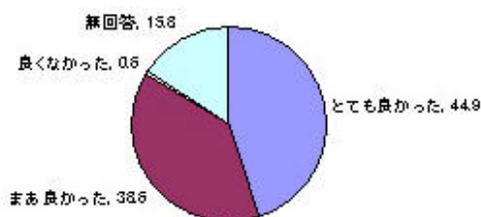


図5 事例報告・パネルディスカッションの良さ (%)

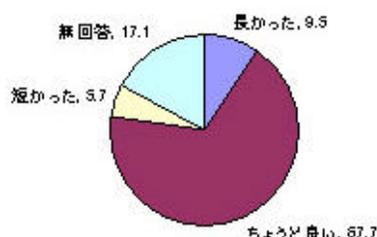


図6 事例報告・パネルディスカッションの時間配分 (%)

(4) シンポジウムの効果

今回のシンポジウムは、参加者にどのような影響を与えたのであろうか。ここでは、様々な影響から、その一つについて検討する。図7にあるように、参加者の約3分の1の者は、既に何らかの子育て支援の「活動をしている」が、6割弱の者は「活動していない」。「活動していない」と回答した者のみに(94名)、「今日話を聞いて、子育て支援に関わるボランティア活動に参加してみたいと思いませんか」と訊いたところ、14.9%の者が「すぐにも参加してみたいと思った」と答え、63.8%の者が「今はできないが、機会があれば参加してみたいと思った」と答えている(図8参照)。活動する時期はともかくとして、8割近くの者が、子育て支援活動に参加したいという意欲をかき立てられたのである。子育て支援を活性化させるささやかなきっかけとして、今回のシンポジウムが役立ったといえそうである。

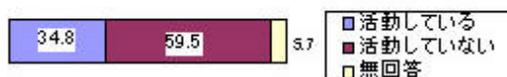


図7 子育て支援活動への参加有無 (%)

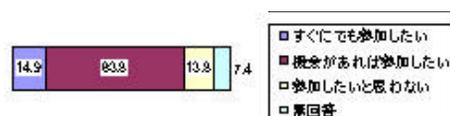


図8 子育て支援活動への参加欲求 (%)

おわりに

「シンポジウムのアンケート」の結果をみるかぎり、今回のシンポジウムは概ね好評であったといえる。シンポジウムの成功を支えたのは、講演者やパネラー等の素晴らしさであるのももちろんこと、受付や会場設営等々のスタッフの尽力も忘れてはならない。多くの人々の努力が、アンケート結果の数字にあらわれているのであろう。

なお、紙幅の都合上、アンケートの自由記述の部分については掲載することはできなかった。その部分の分析も含め、今後の課題とするべきであろう。

こうしたシンポジウムをきっかけとして、子育て支援活動の輪が広がることを切に願う。

(石井久雄)